

開催日時：平成22年1月29日（金）18：30～20：00

会 場：流山市水道局会議室

出席者：

<まちづくり顧問> 三好正也氏／サンジーヴ・スインハ氏／堀内都喜子氏

<流 山 市> 井崎市長／石原副市長

<オブザーバー> 染谷企画財政部長／阿曾都市整備部長／吉田市民生活部長／渡邊学校教育部長
／田村学校教育課長／寺山指導課長／沢柳みどりの課長補佐
／笹田勝義氏（サンアンドサンズアドバイザーズ）

<事 務 局> マーケティング課 5名

計 18名

井崎市長

経営戦略会議を始めたいと思います。今日は三好顧問に「市が今後取り組まなければならない、住民誘致につながる教育サービスを考察する」ということでお話をしていただき、それを受けてディスカッションしていただくのですが、ぜひ流山市が特に教育関係者については、お話をうかがって取り組みそうな部分についての質疑をしていただければと思います。流山はこれから日本が向かう国際社会が浸透していく中でリードできる環境をつくっていくということを念頭にこの会議に参加していただければと思います。いつもと同様パネラー、顧問、会場からも参加していただきたいので、みなさんよろしくお願いたします。では三好顧問よろしくお願いたします。

三好顧問

15分でポイントだけを紹介させていただきますが、コピーを配っていただきました。ちょっとめくっていただきまして、今申し上げた表題をもとに1、2、3、4、5を読ませていただきます。

まず英語会話の実力を身につける、全員です。それから2。さらに流山市が色々な観点からわが国で先端をゆく公共団体のモデルであることを英語もしくは他の外国語でPRする人材を育成する。3番目は異文化交流に関心のある人材を育成すること。4番目は在日外国人との交流をコストがあまりかからない方法で拡大すること。5番目は今回参考文献として「日本大転換」をもとに、流山市がグローバルイネーションとしていかなる人材を育成するかをそれぞれコメントを加えさせていただきます。

まず①英会話をできる実力を身につける。ということは単に外国人と会話を交わすという機会を、要するに英語で道を聞かれてそれを英語で教える程度の英語じゃなくて、会話の中に文化の違い、考え方の違い、論理の組み方の違い、そういうものがこうわかるような、レベルまで英語をやる。ブロークンでも構わないですよ。ブロークンでも構わないからどんどん英語でしゃべって、今言った三つの点。どうしてこう論理の組み立て方が違うのだろうか？サンジーヴさんと我々はとか、そういう疑問がわくくらいの訓練をやってください。私の話も完全にやりとげてないのですが、まだ修行中ですが、しかしアメリカ在住も合計4年、海外旅行200回、80カ国を全部足すと6年くらい海外で行って、英語、フランス語、スペイン語、ロシア語、まあ英語はそのままですけど、スペイン語だのロシア語だの、片言でも似たような言葉で論理と倫理とか同じですからやりました。それが①です。

さらに流山市が色々な観点からわが国の先端をいく公共団体として、これも外国語でPRできる。みなさんにはあるのではないかと。

そして3番ですが、異文化交流に関心のある人材育成をする必要があると、英語プロセスと並行してやはりコミュニケーションだけではなくて、異文化交流なかなか簡単な事のように、実際に難しいですね。それから価値観の違い、論理の違い、さらに広く文化の違いを痛感しますね。それを痛感することがプラスになる。国際化のプロセスというのはそんな簡単なことではないのですが、ぜひ実際に機会を求めてやっていただきたい。流山市の幹部のみなさんに特にお願いしたい。こういうことであります。

4番目は在日外国人との交流。コストがあまりかからない方向で拡大すること。これはタダでもできることがあるのですよ。すぐ話しかけてしまうこと。プラットホームで電車に乗り過ごさないような程度でいいのですよ。「どこの国から来ましたか？」それを恥ずかしがらないでやることですよ。それがきっかけになって、色んなところへ今度遊びに行きますから、と言ってやれば。私がみんなその方式です。英会話なんてお金が高くて。その方式で話しかけてやって、何十年もやっていけばスピーチできるようになりました。

5番目。これからの世界はどうなる、特にアジアはどうなる、日本は、アメリカは、日本はどういう方向で進むのか、地方公共団体なんかはよくやるべきなのかを直接ではないのですが、間接的に示唆してくれる。

本がありましてね、著者は元ソニーの会長の出井伸之氏。付属の紙に概要が書いてある。出井伸之、幻冬舎の新書、新刊で、時代は大転換期にある。どういう転換期になるかということ、行政と関係ないこととおもしろいことを書いてあるのですよ。それはマイケル・ジャクソン、それから日本でそれに当たるのはEXILEのパフォーマンス。マイケル・ジャクソンとかEXILEとかいったものが出て、人気を博していずれも国際性があるという訳です。日本の民謡なんかいくら上手に歌っても。それからアメリカの方もこちらの年取った人にフォークソングやっても。でもマイケル・ジャクソンのパフォーマンスをEXILEのそれに合うような…心が通ずると言っているのですよね。出井さんという人は少し変わってまして、盛田昭夫さんがソニーの会長の時に頭角を現したのですね。であれば火星人だと言われたのですよ。火星人も単なる火星人ではなくて先をみて「ソニーはかくありき」と、結局ソニーがやってきた坊ちゃんの言うとおりになったと。個人的な理由がありまして、早稲田の大学院の修士課程で指導教授役の出井さんの親父さんなのです。また変わった経歴の人で国際電電というのが戦前にあったのですがその国際労働機関というのがジュネーブにあったのですが労働問題とか、生産性の問題もあったのですがその出井さんが脱退して、外務大臣が国際連盟脱退ということで追い返されたのですね。帰って来て早稲田大学の助教授だったのですが、ケインズ経済学をみなさん聞いたことがあると思いますが、ケインズ経済学を日本で数少ない三人ぐらいが大学で教え始めた三人の一人が出井伸之のお父さんの出井盛之なんですよ。

その人がこの言っているのがソニー改革ということでありまして、これから文明の壁を乗り越えて、これから日本がどこへヒットしていくか、今は日米関係が、だったのですが、これからは中国という具合にいくのか。これちょっと読んでいただくと、やや中国の方へいくのじゃないかと、アメリカさよならではない。だからこれは数字は書いてないのですが、今までアメリカ8割、中国が2割、その他アメリカ7割、中国2割、その他ヨーロッパを含めて1割か。経済違います。インドも入ってきますから。関心の度合い。それをアメリカを半分以下にして、ここで言っていることは中国を…しろということですよ。

井崎市長

かなり国際的な観点から大きな話がありましたけれども、まず質疑を受け付けたいと思いますが、いかかでしょう？では顧問のみなさんの中で意見がございましたらお願いします。

堀内顧問

三好顧問というよりも流山市の現在の状況を教えていただきたい。例えばこちらに在日外国人のとの交流でしたり、ありましたけれども特に今、市の方で取り組みですとか、それからあと姉妹都市、ご飯食べながらもそんな話を、インドの街との交流とか。流山市の姉妹都市、色々計画を含めあると思うのですが交流といった意味で、現在の状況を教えてください。

井崎市長

まず国際交流との観点では流山市に国際交流協会というのと、それからもう一つ、元々そこにいた人たちがグローバル流山という団体を作って、この二つの団体がいわゆる外国人あるいは流山の人たちの関係のある町の外国から来られた時に、交流して活動している。それから若い人たちは流山の観光資源を英語で紹介をしているツアーを企画したり、少し変わった、もう少し日常的な活動をということで今動いていて、地図を作ったりして。

国際姉妹都市や友好都市はまだしておりませんので、流山市民が滞在していくと、今は国際姉妹都市の可能性と、可能性があれば候補地などを検討する委員会が出来て、もう報告書も来月できてくる。私が国際姉妹都市にとお願いしたのは、実質的な交流、市民がビジネスが実質的なメリットを感じる関係で、今までのような行政、市議だとか市長をはじめ役人の高官とか大名行列的なことはできるだけ避けて、とりあえずインターネットを出して、お金のかからないしかもメリットが盛大的なメリットがある。あるいは子供の国際的視野に入れた時にメリットがある交流をしたいなということを考えています。

私はやはり子供の時からそういう感覚を身につけると、それから中小企業の方たちがチャンスを互いに持ち合うという意味では、今までのやり方ではとは違う国際姉妹都市がいいかと思う。

石原副市長

今回の三好顧問のテーマが「住民誘致につながる教育サービスを…する」とあったのですが、あえて私の方のイメージですと教育行政ではなく教育サービスというものに真髓があるのかなという風に考えているのですが、住民誘致である教育サービスというのは、を解説していただきたい。

三好顧問

環境をつくる。英語はできないで国際交流やっても楽しく入れない。ですから英語をブロークンでもいいから、年齢に関係なく一から始めて、ある程度コミュニケーションできるようになるような場をつくる、雰囲気をつくる、市がリーダーシップを発揮するということなのです。それをあまり固く考えないで頭柔軟にして。サンジューヴさんじゃないですがインド人というのは、日本人からいくと失礼なくらい平気なのですよね。

石原副市長

おっしゃっていることはわかりますが、あくまでも教育サービスとしてどちらかと言うと市長が唱えているのがインターナショナルスクールとか、インド人の方の学校とか、そういうのを総称して教育と

いうのかなと私は理解していたものですから、単にそうすると今、学校の先生も、ですけれども、小学校から英語教育というのを流山市のそういう意味の取り組みというのはしております。

三好顧問

ちょっと言葉が足りなかった。そういう制度やケースが多いので言わなかったのだが、形式より内容ですから。だから内容を効果的にやらないことをしたら制度は後からついてくるのですね。こういう制度でやった…お互いに時間が無駄になって成果があがらないだろうという、だからケースバイケースなのですよね。始めから制度ありで、だったらやらない方がいいのです。外人が来たらガラリと変わってぼんぼん質問すると言う場をかなりの経験をしないと。流山市がどういう理想説があるかと、どういサービスが市としてできるかできないか。それはみなさん考えないと。内容についてです。

サンジーヴ・スインハ顧問

具体的にどういう一歩をだせばいいのか。

三好顧問

ちょっとわからないところもあるのですが、それは何か制度を作った場合に、責任者になってうまくいかなかったら、予算その他の面で負担をかけた責任をその人がとるかどうかといった問題にいくんじゃないんですか？といったところですか、それも。そういうリスクもあるから、ということですよ？始めれば何かそういうリスクはあるけれども、プラスがどんどんでてるからそのプラスが大きくなれば、多少のリスクはあっても前に進むんですよ。だから具体的に英語のできる人はできる、ポンポンポン、サンジーヴさんに話してもらっても構わない。でもまだ恥ずかしい、しゃべれないという人は、テキストがあるんですよ。シンキングイングリッシュ。インド人が使っているんですよ。学校で使ってビックリした。日本語でシンキングイングリッシュ。著者の名前があるんですけども、戦前につくったこんな薄い本でパターンでパッパッパッと全部暗記する。そうすると自然にしゃべれるようになる。私が英語をマスターしたのはその1冊でやりました。

井崎市長

さっき言ったように市民のグループが、特に若いグループが外国人を誘致して市内の公共施設や観光を定期的に案内というのを考えている。流山に外国人の方がなんかのきっかけで来られて、あるいはこれからもしかしたら流山に住んでというような場合もそういう意識ある市民ならともかく、そうでない市民が英語をしゃべれるといってもしょうがないので、学校の先生と市の職員が本当に英語としてはブローケンイングリッシュできれいな正当な英語ではなくても、情熱を、気持ちの通じる英語である。それをやっていけばかなりだいぶ違うと思う。教育委員会の方々の交流はあるのですか？

井崎市長

市の職員との交流もあっていいかなと。せめて流山が子供たちもそうなんですけれども、市の職員が流山がどんなところか、いいところなのだと、日本語でも言えないと、英語で言えるようなそれくらいまでは研修項目に入れておいてもいいのかなと。それで市役所に初めて来られた時によくわからなかったけど気持ちは通じたとか、それくらいは市の職員として何とかしたいなと。それからあと外国人の方の居住者、流山に住んでいただくためには私はどうしてもインターナショナルスクールが必要だと思う

のですけれども。グローバルインディアンインターナショナルスクールは、そこにいる日本人に対して、ですから本当に私たちは、日本の学校、日本の就職、誰も日本語で話していますが、もうインターナショナルスクールができる…、流山市の外国人ではなくて日本人が預ける時代だと思うのですね。そういう意味で教育委員会の方もインターナショナルスクールが出てくることに対して、日本の学校がそういうところで影響できるような、そういうことも積極的に考えていかないと、流山にインターナショナルスクールできるまでじゃなくて、東京にあるありとあらゆるものを流山との関係でもってきたら、子供たちの視野も広がるし、おそらく親や先生の視野も広がるのかなと思うんですけれども。

サンジーヴ・スインハ顧問

そういう交流は新しく学校が出来るまで待つよりも今、早めに何か交流を始めたところ、私はグローバルインターナショナルスクールの関係もやっている。具体的に一緒に活動も。グローバルインターナショナルスクールのどこにおいても、まわりに8割がインドの学生達で2割位が日本人で、2割でも多い方。学校としてうれしい方です。例えばインターナショナルスクールからの先生たちが、週に何回か、日本も流山市が学校の先生がグローバルインターナショナルスクールは結構教師の数も少ないので日本人のちゃんとした先生とか日本の歴史、ちゃんと教えてくれる先生や日本語教えてくれる先生が、ITの先生、コンピューターを教える先生、日本人の先生は出来るのでそれは問題ないと思いますが、ちょっと交流を始めようということインド人の先生を入れてもらって、流山の学校で影響を受ける。

井崎市長

先生の交流とか先生がお互いに教えに行くとか、学級祭、ああいった時に生徒たちが例えばインドの踊りを流山のどこかの小中学校の学園祭とか文化会とかでやっていただくとか、流山の子供がそちらに行って何かやるとか。色んな事が考えられると思うので、そうすると非常に楽しい今まで経験してない世界が広がりますね。

三好顧問

国際交流はどこも色々な形でやっているが、流山らしい決め手は何かといたら私はやはり年齢のいかに問わずある程度会話ができると。そしてその議論のできるような方向に向けてそれにみんなグループで会話ができる、できると思うんですよ。私の経験から言って英会話学院に行かないでやる方法は、ラジオで英語の放送があると思いますが、それを作り出せる取り組みをまず市の偉い人と皆さん方がやたらとわかっていることなんです。あと文化交流とか他でもやってますしね。いいモデルがあったらコストとプロダクトのバランスを考えながら、無駄な事はやらない、みんながやる、というのですか。

それは例がたくさんありますから、またサンジーヴさんなんかにも言ってやればたくさんあるんだと思いますが、その元になる英語というものをもうちょっと真剣に忙しいみなさんには恐縮なのですが、やり方があるのですよね。例えばさっき言いかけたのですが、あの本でパターンを言い繰り返してるうちにごく簡単なクエッション、アンサー。それをグルグルやると何となくしゃべれるようになる。私が英語勉強したのはそれなのです。ハロルド・ハーマーさんシンキングインイングリッシュ英語で考える1冊の本。残念ながら探したのですけれどもなくなっちゃいましてね。どっか図書館にあるんじゃないかな。本屋にはないのですよ。それはぜひ使っていただきたいなど。

井崎市長

今日は総務部が来ていませんが、人事評価の高い、とにかく、職員が流山をPRできるような英語研修は考えた方がいいかなど。

三好顧問

私は、悪役はできないけど、みなさん、睡眠時間を一日1時間削るのではなく、みんなで飲みに行こうというのを月に一回くらいやめて、毎日30分、1時間何でもいいから議論すると、流山市について、日本国について、それを英語でやる機会を増やすと、市の偉い方々はその見本を示すと。若い人は、歳とった人ががんばってやっているんだから、私たちもどうしてもやらなければならないと、付いてきますから。

堀内顧問

やはり、日本語でもそうですし、中国語でもそうですし、自分の故郷を紹介するというのは、やはり重要な事だと思いますので、安い、5回くらいの講座を企画して、市民の人達にも参加してもらうとかそういう事も出来ると思うんですよね。やはり、必要性を感じないと、英語にしても外国語にしても、覚えるというのは難しいと思うんですよね。今子供たちにしても、英語といっても、受験のための英語になりがちなので、勉強しているものを使う機会というものが必要だと思うんですよ。それが姉妹都市なのか、学校間の個人的な繋がりなのか、形はいろいろだと思うのですが、市長もおっしゃっていた通りインターネットというものが今はあるので、eメールでの交流というのものができますし、例えばどこか違う国の同じ中学生の同じ歳の子供と毎日どんな事してるのとか、eメールやビデオだって今はすぐに送れますし、ライブチャットでもパソコンを通して今は話せますから。そういうことを積極的にやっていくなかで、話したいと思う事がやはり重要だと思うんですよね。私自身も田舎の出身で、親戚も両親も海外旅行なんて一度もしたことがない中で育ってきたのですけれども、合唱団に入っていて、当時はチェコスロバキアだったのですが、合唱団の子供たちが来て、交流会があったのですが、向こうは英語を片言しゃべっていても、こっちは英語をまったく話すことができなくて、それがものすごく強烈な経験で、英語に興味をもったんですよね。

今は海外旅行があたりまえになってきたとはいえ、そういった機会を与えるのはすごい重要だと思うので、子供たちもそうですし、大人たちもやっぱり勉強した英語をどんどん使う機会を持つことで、またさらに勉強しようと思うと思うんですよね。日本にいる外国人や、それから外国人の人達に流山を紹介する機会というものをもっともっと持つべきです。ただ、待っていても、そのような機会はないので、例えば海外の何かの機会に参加するとか、一人ひとりの機会を見つけていかなければならないと思うんですよね。そういったなかで、機会を見つけて言葉が増えていけば、国際交流というものは自然に増えていきます。そこにいる外国人の人達、例えば学校だったり、大人だったら、料理教室だとか中国の人に餃子を教えてもらうとかインドの人に、インド料理を教えてもらうとか、そういったなかでも国際交流はできますし、スポーツでもいいですし、本当にそういった機会を作ってほしいと思います。

三好顧問

経団連と日経連が統合した日本経団連に3千人職員がいるんですよ。そのうちの3分の1は総務とか庶務とか、あまり英語を使わないポストですね。200人は英語をしゃべらなくていいポストにつけないんですよ。いわゆる調査系は英語ができる。私が入ったところは逆だったんです。まわりにはっきり言

ったんですよ、英語ができないと昇格しないと。給料も上がらないんだと。そういう制度を作らないとみんなやらないよと。そしたら間接的に採用されたんですね。そういう状況を、流山市にできるかどうか私にはわからないから、でも先頭に行く市になれるんじゃないかと。日本全体が日本語を国際語にするのは無理なのだから、それはあきらめて、日本語は日本語で守っていく、だけれども、英語もできるぐらいの国になろうじゃないかということなのですね。その先頭に行くのが流山。流山市はせっかく先頭をいこうという市長がいるのだから、それを実現させたらどうですか。

井崎市長

企画ですね…。

三好顧問

だからどういう風にやったらいいか。安上がりな方法を研究しましょうよ。時間的にも金銭的にも在世的にもそんな負担がかからない方法でやる方法があると思うのですが、さっき言ったシンキングイングリッシュを20～30のパターンを覚える。テープレコーダーに入れておいてそれをみんなで持ち寄って、お互いに聞くとか。

これから先は流山市に限らず日本全体がそういうニーズに迫られますよ。ものすごいですからね。中国人の方が先いってますからね、英語などについては、韓国人の方が先いってます。日本だけ取り残されるような状況が生まれつつある。それは年齢の如何を問わず、今からでも遅くはない。私は断言します。

堀内顧問

市のパンフレットで英語化のものは何かあるのでしょうか？

井崎市長

市のホームページとか基本的なサービスについては英語であります。それから企業誘致の為のパンフレットは英語で出しています。

三好顧問

流山はいままでずっと常に色んな分野で、先をいつているんですよ。街並みをどうするとか、先をいつている国際化、国際化でもある分野では先をいつている。言葉でみんなコミュニケーションできる。

井崎市長

少なくとも流山市の人口の1%ぐらいですかね、外国人の方が在住している。だから市役所の中にいる私たちは、市民のほとんどの方の感覚からいくと非常に遅れている。閉鎖的で必要と感じていない。例えば、英語も確かに中国、韓国に比べると日本は…といこともあるが、GNP一人あたりのGNPで18位くらいですか？ますます日本は視野になくなってくると思うんですね。真剣に取り組んだ方がいいかな、

三好顧問

流山は今からでも遅くないので、芋を引っ張るくらいの勢いで、費用はあまりかけないようにしてや

る方法を考えながら、やったらどうかと思います。日本全体が必要としているんですよ。大きな市で流山市はかなり大きな市ですから市がまとまってやるというのはできないけれども、小さな隣組みたいなのをやっているケースが増えている。同好会みたいなのでやっているうちに、そのうちテーマ決めてやろうとか、議論を決めてやると今度はおもしろくなってくる。

井崎市長

そういう意味ではこういう国際交流は今度市民まつり、森のフェスティバルにインドの人を呼んで、呼ぶきっかけができれば、できればチャンスがそういったことがあれば使ってみることが大きい。

サンジーヴ・スインハ顧問

必要性があれば国際化も英語の勉強も。そういうところで一番の大切な事は経済的な事ですかね。昨日千葉商科大学の島田学長と色々食事しながら話をしていたところで、ちょうどインドで色々国際的な、日本の中小企業の社長たちや経営者などの150人くらいの島田塾という形で、島田先生が学長で活動しています。今からもっと増やして、インドに日本の中小企業を育ててやりたい。そういうところでまずは日本のこと知られていないこと、他の国もそうですが知られていないところで、一個だけでも先に出せばみんながインドとの交流、魅力を感じると思う。私の経験でも元々は英語全然出来ない人でもちょっと海外的なビジネスを始めたら、やはりわからなくてはいけないということで英語勉強しようという。経済的なチャンス見えたら高まります。それはちょうど国際化しながら英語のレベルも上がりますし経済的な国際化も一緒に行うところもあります。

三好顧問

企業も今は国際化、英語ができないと出張とか困る。ファミリービジネスなんかの場合は電話できない。みんなそうです。外務省は、英語ができないといけない人がどんどん増えています。役人さんも中央では。地方市町村で県レベルは別としてその先端をいくうちに市に、流山は先頭をいく市になれる資格があると思うんですよ、もう既に。その意思があると思うんです。実行はどうするかというと今サンジーヴさんが言った具体例で、流山にあった、どういう交流をやったらいいか、まず若い人たちはいずれにしてもほっといていても、しゃべんなきゃダメだとスキルが増えないという時代がもう5年10年したら来ます。ほっといてもやるんですよ。問題は今の出来あがった人達を恥も外聞もなくやるような動機づけ、恥ずかしがり屋の人はこういう風にやったらいいとか、平気な人はこういう風にやったらいいとか、そういう言葉、私なんかよりも優れた英語をしゃべる市長なんかいい。

井崎市長

今までの議論の中で英語のできる人達の議論じゃなくて、ここで議論されている事を流山市がしっかりやって、外国人の住民誘致にも繋がってくぐらいのことをやろうと思うが、英語の出来ない方がどうやったら積極的になるかということを考える。ぜひどういう風な仕組みにしたとか、計画を作るかということ、こういう風にしたらできるんだというあたりは是非、それぞれの立場で考えていただければと思う。あと今日は最後ですので今までの理論を総括して、あるいは全体の中で、色々質疑があれば。前々回ですかね、堀内さんからフィンランドは教育課程にある大学生を、日本で言うとサポート教育のようにして、使うと安いということ。ボランティアとしてきてもらうという手もある。

学校教育部の方で例えば子供たちの教育課程を取るだけじゃなくて、教員になろうとしている人達を

例えば、大学とこの辺にある教育に力を入れている学校と協議をして、流山市でサポート教員を1年ないし2年やってくれることで、インターンシップとか可能かどうか。もちろん文科省、インターンシップもう大学で始まっています。それに教員なんかが該当できないかな？というようなことを考えてもいいんじゃないかと思う。

(オブザーバー)

実際に教員の卵というか教員を目指している「たまごプロジェクト」といって、若い先生が入っている。やはりその人達は実際に教員を目指して適性があるかを経験を通じて見極めることをしていますし、受け入れとしてもこの学生さんは将来教員として、欲しいかという目で見て、それから子供達も若い学生さん来るということで色んな効果がでてくる。教員免許はもっていない。教職課程の大学に在学していて、サポート教員…市独自で雇用している教員ということです。

(オブザーバー)

市長から話が出た若い人の一番近い実践的なものは、大学生の現役で東京理科大学の大学院生が教授とともに理科の授業をサポートするというのが実際ある。あと先ほどあったように、教員になりたいんだけど、流山市でやっているのがサポート教員であって将来正式な教員として採用してもらう足がかりを作る。若い人は大きく2つのパターンになっている。文科省の中ではさらに色んな形で子供達にかかわってあげて欲しいということで、地域の大学生をそこに入れようという政策がある。ただ実際には学生は忙しい。ようするに学校もそれなりのことをやらなきゃいけない。時間の問題がかなりあり、作画的にやらないと実際にはそういう若い人が学校に奉仕的な意味では来てくれないことが現実にある。

井崎市長

インターンシップとして単位実習として認められるような風に考えないとなかなかできない。

それは今までのネットワークで声をかけてきてしてきた部分もあると思うので、大々的にやるのであればもうマスコミに発表して…。

(オブザーバー)

大学側もすごく気を遣う。なぜならばなりたいたいと言っている学生が本当に適性があって子供達にいい影響を与えるかどうか、大学の方も出す場合は先生が選別する。行きました、効果マイナスだったのでは…。ですからそこで必ず大学とのやりとりを今までしてきました。実はその大学生があまり質のいい子供の見本になるような大学生ではない。ということがおこると逆に問題になる。そこは結局今までは、大学との話し合いの中で送ってもらっていたという現実です。

(オブザーバー)

「教育たまごプロジェクト」というのを説明されたんですけど、県でやっているんですよ。県が主体になってやっています、400人から500人を超える採用するんです。それは教職をとっている子供達がもし決まったら、日本中どこからでも構わない。千葉県で基本的には年間30日、大学3年生か4年生。教職課程をとっている子供達、最初はとるんですけど、2年3年になって上がってくると理科系の子なんか、つらかったりして、本当に教員になりたい子以外は結構もれてきちゃう。最終的には江戸川大学のこの間話を聞いたら教職設けても、4年生まで頑張るといのは数が少なくなって

しまう。なかなか県でも300人から結構厳しい。県の場合にはそれをやることによってモデルになって、同じようなことを東京でもやってるし神奈川でも。人材を集める為に企画してやっていますから、その中でじゃあ流山でと…。

堀内顧問

それは報酬払っているのですか？

(オブザーバー)

払ってないです。タダです。同じような事を東京でやっていますし神奈川でもあります。

堀内顧問

独自に例えばこの市とどこかの大学とだけで個別に提携するというのは難しいのですか？

井崎市長

人事権が県ですから。

(オブザーバー)

大学で考えているのは学生の単位。単位をどうもらえるのか。

(オブザーバー)

流山ではかなり前から日本人の英語の指導員の方、来ていただいて、非常にモデルとしていいんですね。海外の生活が長かったりとか英語に堪能な人が目の前にいて、子供達、小学生ですが英語の授業やってもらっていて…。キャサリンとスキップのように外国の方が入って、日本の指導員と英語の堪能な外国の先生と会話をしているところ、そこに英語の苦手な先生も入って、実際自分たちも交流しながら行えるということは流山の特徴だと思うんですね。日本の国際化の一つのモデルだと思うんです。そういう人が目の前にいて、それを先生も学べるというところでは非常によいと思います。初等教育としては流山のいいところをPRしなきゃいけないと思うというご意見もありました。確かにそうだと思いますが、その中で日本語でも言えない子が結構いますとあり、やはり三本柱で考えなければいけないと思うんですね。

日本人としてはアイデンティティというか地域の生活に日本の祭りとか文化とか伝統とかちゃんと身に付けた日本人としてのアイデンティティも必要だし、これまでは西洋の文化に憧れて英語を学ぶというのが従来のモデルだったが、共通言語としての英語を学ぶとアジアでもどこでも世界中で英語というのは必要なんだという感じのものとしての認識とやはりコミュニケーション能力、感性というのかね、それを小さいうちから育てるといふ。やはり流山での外国語指導のモデル、英語の指導そのものというよりも感性を育てるところを…。それで必要性があればいくらでもスキルは伸びる、底力というものを学校教育の中でつくっていくのが基本だなと考える。

井崎市長

外国人誘致ということで確かにそれは一つとして、要は高齢者社会で経費がかかるんだとそうすると確かに流山だけは若い人達に他市から入ってきていただいて、流山市を楽しんでいただくと同時に高齢

者社会を支えていただくということ。その時に外国人も含めて、若い人たちに入っていたきたいということで、3日か4日前に毎日新聞の記者が出所なんです、ヤフーの記事で流山が、TXが出来て4年で1000人増という記事がありました。そのニュースのポイントは今まで団塊の世代60歳から64歳までは最も流山市の人口が多いボリューム層だったのですが、それが35～39歳がそれを越したと。それを続けていくには外国人を含めて住民誘致をしなければならない。今までの議論の中で今日、最初のタイトルで、国際社会の流山市は…、これが違うんだなど。普段私たちの生活の中で、国際社会の流山、少なくとも今の流山市役所は国際社会を考えなくてもいけると思っていた。ところがやっているのではなくてそれだけにどのくらいの機会損出しているかがある。国際社会に背を向けた流山市になりかねないので、国際社会における流山市ということを考えて、色んな事をやっていくと、今まで出来ないと思っていた事が出来るようになったりしてチャンス。これは国際社会における流山市の後期基本計画では高齢者社会に対応とか、地球温暖化、10年間の柱としたのですが、国際社会における流山市で考えると具体的に困るのはどれだけチャンスを失っているとは思いますね。

三好顧問

各大学に英語会というものがあるんですね。そこはピンキリの人がいるのですが、そこに行ってもいいし。何が目的で英語を勉強しているかという色んな人が集まって、サークルを作ってやっているです。国際化といっても画一的にやるのではなく、英語が下手なんだが人がしゃべっているのを聞きたいとか、あるいは人の話を聞かず自分でしゃべりたいとか、色んな人がいますからね。流山市が英語会を作るなど一つの案だと思いますよ。場所は市の施設で、1時間2時間でも集まって、何人か自由にしゃべって、出来ない人は出来ない人で、あるいは出来る人と出来ない人を混ぜて会話させるとか、費用があまりかからないで、今お話にでた大学生がきてやるとか、どういう制約があるとかメリットがあるとか、英語会づくりというのは勢いが無いと。そういう面では私は早稲田大学の英語会の学部ごとの英語会の文学部と政経と違うんですが、全学の英語会の幹事長を何年か務めていた。部屋入りきれないです。600人くらいいるのだが部屋が50人くらいしか入れないのでいつも満員です。会費はそんなに高くない。ポケットマネーで大丈夫。入会金が割合高い。その部屋は50人位しか入れない。学期、年度が変わった時に幹事長、副幹事長で各学校に行き行って宣伝演説するんですよ。

堀内顧問

国際社会の流山市というので、やはり今すぐは無理ですけれども国際的に流山市といたらこうというようなアピール出来るものが何なのかといくことを、みなさん考えてそれに一つ一つに絞る必要はないと思いますが、何かこう流山、例えば流山だから誰でも英語を話せるとか、流山といたらエコなファッションとか、そういう形で何か強みを持つことで、観光地としては有名な街ではなくても、こういうモデル都市として見に行ってみたいなあと思わせてもらえるとか。いずれ将来的にもアピールしていくというのでも…。

井崎市長

先日、ジャパンスポットライト、外務省の、経済産業省の国際経済交流財団で出しているジャパンスポットライトという日本の産業を紹介、都市ごとに紹介したり、産業そのものを紹介する雑誌なんです、英語で海外の法律機関、サンジーヴさんの会議の時に会った方で流山…ということで書いたのですが、産業といってもちょっと困るんですよ。それで書いたのが東京のアーバンリゾートと書いたの

ですが、利根運河とオープンガーデンとそれとどうしても産業のことを何か付け加えてくれということなので、とにかく日本を、東京を、訪れた方々がほっとしたければ流山で一日過ごしてください。という趣旨のことを書いた。その雑誌が元産業系なんですね。流山で海外に進出すべき産業とは思わなかったの、ほっとする東京郊外の都市ということで。ほっとしたければ流山市にどうぞということで、企業誘致に変わって。とにかく国際社会といことを念頭に仕事をしていかなきゃいけない時代が来ているので、違いが、みなさん自身が気がつかないふりをして仕事は続くられるんだけど、そのことによって流山市の可能性がどれ程引き出せないで終わっているのか、ってことについては十分考えなければいけないということを…。英語会、気になっている。

三好顧問

英語会は三つくらい作った方がいい。競争させる。ディベントコンテストをやったり…早稲田大学なんかやりましたよ、何学部の英語会とか…。

サンジーヴ・スインハ顧問

飲みながら話すといい… (笑)

井崎市長

その節は皆様にご協力いただければ。その他に顧問のみなさんで最後流山のこれからでの住民誘致、発展の為に…何かあれば。

サンジーヴ・スインハ顧問

ひとつだけインドからチャレンジで流山市に来て、みんな魅力感じています。流山市は非常に色々魅力をもっていると思う。日本人はすごく、謙虚で、日本人自身が自分の魅力を感じないことが多い。

石原副市長

外国旅行に行くと日本に帰ってくるとほっとするのは、成田に着くと。日本ほどきれいな街はない。きれいとはクリーン、ゴミが落ちてない。流山は3月にペットとか公共の場に禁止する条例を出します。そうするともっときれいになる。そういう事でいくと結構衛生的。こういうところはキチンと発信していく必要があると思う。

三好顧問

キーワードが要するに環境、グリーンチェーンでしょ。きれいである。それから教育も優れている。今日は私が英語、英語といいましたが、残念ながら英語は国際語ですから、国際性というのをさらに加えていくこと。環境、教育、それぞれダブルなのですが環境、教育、国際性というトライアングル。じゃあ国際性ってなんだ、全員がしゃべるわけでないが何人か英語出来る人がいると電話で済む。

石原副市長

流山の採用試験なんですけど、同じ能力、同じレベルでいけば法律の詳しい人、英語のできる人、TOEIC、英検のできる人を採用するようにする。それだけという訳じゃないのだが人間性が良くて健康で、昔は贅沢言えるほどいい職場ではないので、そういう贅沢言えなかった。

三好顧問

英語ができて国際性といえれば行儀よくなる。行儀よく成らざるを得ない。

堀内顧問

英語の出来る人を採用しているのであれば、もっと能力を使ってどんどんPRしていかないと、それこそ魅力って色々探せばあると思うので、そういうのをどんどんPRしていくには使っていないと意味がないと思う。

石原副市長

英語が出来る観光案内人が十人いると外国人に観光スポットを案内できる。

堀内顧問

今ネットだったり宣伝できるツールは色々ある。海外からメディアの人に来てもらって。

三好顧問

実は私が内容がない英語じゃなくて、内容をディベートできる英語をしゃべったんで、役員になって、だから経団連は国際性がさかんですからね。だからマストだったんですけども、流山が一つのモデルになってゆく理由は他の市と同じようにならない訳です。すごいなあと他の市が思う訳です。

石原副市長

私、この間テレビで谷中のつぶれそうだった旅館が外国人を相手に大繁盛していると。経団連の三好顧問のように早稲田大学とかそういうのではなくて、本当に義務教育しか受けてないような旅館の親父さんが、イングリッシュどんどん商売の為、家の旅館をつぶさないように親から譲り受けた旅館を守る為に必死にやって、観光のビジネス、中国の方相手に中国語出来る人、英語が出来る人、たくさん優遇してあるいは旅館の中で教育してお迎えする体制によってホテルは繁盛して、その体制が出来てないところはつぶれる。つまり、つぶれるかどうかというのはギリギリの選択の中で、かなり三好顧問の話を聞いて必死になる。

三好顧問

反論じゃないんですよ。私は食べる為に英語を実用英語じゃなくて米国人の英語を、家族を養う為に通訳やったりしたんです。その時代はみじめでしたよ。みんな貧しかった。段々グレードが上がって、それが経団連に入って偶然ではない。

井崎市長

それでは顧問の皆様には本当にお忙しい中ありがとうございました。顧問の方々の流山への提案を無駄にしない為に、ぜひ具体的な企画を。先ほど申し上げたように流山市の高齢者社会を支える為に高齢者も若い人も新しく来られた方もみんなここが定住の地として安心して住み続けられる市である。そのためには健康環境、子育て支援として、具体化して差をつけたていきたいと思います。どうもありがとうございました。